

山 旅

会報 No.177

好山好山旅会

H 20. 11



10月の山 荒沢岳・未丈が岳(上段)越後駒ヶ岳~中ノ岳(下段)

平成20年12月例会山行計画

第一例会	12月6日(土)	
高尾・陣馬	石砂山~石老山	担当者 吉田(博)
第二例会	12月13日(日)	
	忘年山行	
奥多摩	青梅丘陵	担当者 高橋 清水(ふ)

平成20年10月の例会報告

《 越後 荒沢岳・未丈ガ岳 》

荒沢岳 平成20年10月4日(土) 天気 晴れ

参加者 八木(L) 斉藤、中村、高橋、吉田(博)(SL) 梅澤、早川、池田

計8名

- 八木 記 -

荒沢岳の登山口を出発したのは6時ちょっと過ぎ。登山口にトイレまで兼ね備えてあったのは意外だ。7、8年前に訪ねたときは、越後駒ヶ岳は多くの登山者でお祭りのような賑やかさだったと聞いていたが、荒沢岳では一人の登山者さえも見られなかった。登山道は水源地のような沢を離れて山腹へと向かい、15分後には尾根へ。

朝の日差しがブナ林の中に通い、白く輝いている幹がすがすがしい。ブナの葉は今は黄みを帯び始め、この辺りでは黄葉も緒に付いたばかりのようだ。

ジクザクに登って尾根のより高い位置へと前進し、気休め程度に何げなく後ろを振り向けば、見えるはずの奥只見湖の湖面は霧に覆われていた。前山に着いたことは足元の三角点の標石で知ったが、ここから下り坂になる。

5分後に登り返しを迎えて一度高みに立つと、その後は緩やかな登りがしばらく続く。前方に荒沢岳が山容を出すと登山道は平坦になり、間もなく行く手を指針するように前岨(まえぐら)が荒沢岳に重なって見えてくる。

先でもう一度重なって見ると下り坂になり、また緩やかに登って重なって見えた三度目で前岨にグッと迫って悲愴になる気持ちを叱咤し、四度目で前岨の直下まで下って行く。この先岩場危険の注意書きを見て心を雄々しくするべく時間を取ってから登りに挑んだ。重苦しい空気の包んでいる樹林の中をひと登りしてから20mほどもある垂直に近い岩場の取持ちに鎖が張ってあるが、足がかりは堅固なものでしめしめと胸の内ですまして三点確保の体勢で登って行く。

足元の険相さを覗いたら恐怖心で自縄自縛に陥って身動きが取れなくなるので、振り返らずに敵愾心をひたすら待ち構える岩場に燃やし、ハシゴ、鎖、ハシゴと目先を変えて尾根に一度飛び出す。すぐに視線に入ったのはお先真っ暗になる前岨の本体の姿であり、鋸歯状の岩峰を見上げてしばし呆然。

ここまでは序盤戦に過ぎなかった事をあらためて思い知るが、本番の登山道は前岨東面の岩壁の基部に付いている。鎖三本と長いロープ一本で下って行く登山道は底が抜けているようでもあり、下るだけ下ってようやく長い登り返しの途に付く。

草付の岩場の登りは始めから終わりまで鎖が施され、足場をとどめるところもたくさんあって危険な岩場とは言えないが、油断大敵なのは長すぎることから生じる気の緩みだ。尾根に立ってから5分後に前岨の山名標のある場所に着き、後は尾根道を歩くだけになる。尾根の左右の急な傾斜には真赤に染まった灌木と笹の緑の対照が美しく、紅葉前線の真っ只中に踏み込んでいるようだった。

主稜線に出て右側に進み、岩峰を四つほど越すと荒沢岳に到着する。山頂の景色は見事だ。四囲に取り巻く山々があまねく広がっている。まずは通り一遍に見回し、その後じっくり主立つ山々に視線を凝らした。すぐに目に入って来たのは、やっぱりこの限界を領して双壁をなしている越後駒ヶ岳と中ノ岳だ。

しばらく釘付けになったが、見飽きることがなかった。その後おもむろに視線をもう少し西側に移してみれば、足下に気持ちの良い尾根が平原のように見えるはずだ。

荒沢岳で端を極めていたかのように思う尾根が、ここからもくねくねと蛇行しながら灰の又山を介して兔岳に向かっている。

一部の笹原にはくっきりと道筋を現わし、そこに向かっているのが足元に見える薄い踏跡だ。南側では、とりとめなく范乎としている平ヶ岳の平頂を霞みがちに捉えることができ、更にその左側ではまったく両極端の山容を持つ燧ヶ岳が大空に双耳峰を突き立てていた。

視線を反対にすれば、明日登る未丈ヶ岳が眺められ、眼下では今辿ってきた尾根の一部始終が一望することができる。下山は同じ道を引き返すだけだ。

前峠を慎重に期して突破したら、胸のつかえがおり、足の重石が取れたように足早になる。登山口に戻ったのは出発してから9時間余り経った頃である。

未丈ヶ岳 10月5日(日) 晴れ

参加者 大田、小野、斉藤、中村、高橋、八木、本多(正)、吉田(博)、梅澤、早川、池田、武田 計12名

- 大田 記 -

前日の夕方に、荒沢岳に登山した先発隊と奥只見山荘で合流した4人と総勢12名で登山口まで車で移動した。泣沢避難口を出発したのは5時15分頃だった。辺りはまだ暗くライトを点けて出発した。暫くは下り道となる。

2か所ほど徒渉し、クサリを頼りに沢に下りまた徒渉し、クサリを頼りに登り少し進み黒又川本流に架かる手すりもない赤い鉄橋を渡ると三ツ又口に着いた。

右手から尾根にさしかかり、ひと汗かく頃、蝙蝠が羽を広げたような荒沢岳が見えていた。この辺りで標高は600メートルくらいだった。

山道には意外に松の木が多かった。遙か先に未丈ヶ岳が見えていた。ふと背後を見ると、越後駒ヶ岳が見えていた。松、檜、ブナの茂る尾根道をひたすら歩くと974メートルピークを通り過ぎ、左側を緩く下ると松の木ダオだった。

ここで少し休んだ、さらに登ると、「松の木沢の頭」、「慰霊碑」などがありこれらを通ると灌木が多くなり、ネマガリタケも多くなって来る。さらに急登1時間程度で2等三角点の設置してある未丈ヶ岳山頂に到着した。記念写真を撮ったあと、頂上直下の東側斜面の草原に下りて食事休憩とした。

この斜面は花の宝庫となっているとのことだったが、この時期は広い黄金色の草原になっており、暫し、童心にかえり、草原を楽しんだ。

この辺りでは2000年に公開された映画「ホワイトアウト」(織田裕二主演)の撮影がされたとどなたかに教えていただいたが、この広い草原で雪や霧で視界が遮られると確かにホワイトアウトになるかも知れないと一人で納得してしまった。

帰りは往路を戻るのが、車で帰宅される高橋さん、八木さんに先頭を歩いてもらい、余り変化のない道をひたすら下った。帰りも痩せた長い尾根はそれなりに歩き甲斐があった。途中で振り返ってみるとなだらかな未丈ヶ岳は大きく高く、どっしりとした重厚な山容だった。

松の木ダオからどんどん下って水の音が聞こえてくるようになると、少し、ひんやりとした風が吹いてきた。だいぶ疲れた頃に沢に下りてきた鉄橋と2か所の徒渉もそれほど難儀せずに登山口に2時10分頃に戻ってきた。

だいぶ早くに到着した、高橋さんと八木さんは車のため、そのまま帰途についたとのことであった。着替え休憩をしていると2時半には宿のマイクロバスが我々を迎えにきて、そのまま浦佐の駅まで送ってくれた。

コースタイム

10月4日

荒沢岳登山口(6:05)前山(6:55)前嵯直下(7:45~7:55)
稜線に出る(8:55~9:05)前嵯(9:10)荒沢岳(10:35~11:10)

前嵯(12:15)前嵯直下(13:35~14:40)前山(14:40)

荒沢岳登山口(15:15)

10月5日

泣沢避難口(5:15)松の木のダオ(7:35~40)未丈ヶ岳(9:45~9:55)

頂上直下東側斜面(10:00~30)松の木のダオ(12:10~15)

泣沢避難口(5:15)

費用

JR東京駅	浦佐駅(上越新幹線)	7,970円
JR浦佐駅	銀山平(南越後観光バス)	770円
奥只見山荘(1人1泊)		9,000円
奥只見山荘	泣沢避難口(宿の車)	1,000円(1名あたり)
泣沢避難口	JR浦佐駅(宿の車)	1,000円
JR浦佐駅	JR東京駅(上越新幹線)	7,970円

《 越後 越後駒ヶ岳～中ノ岳 》

参加者 八木（L）中村、梅澤、川端

計4名

- 八木 記 -

平成20年10月11日（土） 天気 雨

越後駒ヶ岳も中ノ岳も個別に一度登っている山であり、山行の目的は個人的にはこの両雄の山をつなげることに尽きる。

越後駒ヶ岳は以前に枝折（しおり）峠から登っているが、今日は駒ノ小屋に行くだけであり、もう少し骨の折れる小倉尾根コースを登路に取ることにした。小出駅からタクシーに乗って駒ノ湯に向かい、休憩舎の軒下で身づくろいしてからなんやかんやで登山口を発ったのが9時10分だ。

この間に登山口も確かめもせず上の林道を行き、20分も時間を無駄にした。登山口は駒ノ湯の敷地に入るのではなく、橋を渡る手前で左側に向かう。入山届けを入れるポストが設置してあり、すぐ先で道行沢に架かる吊橋を渡る。

尾根を目指す、でばなからたいそうの急傾斜であり、尾根に乗った頃には駒ノ湯の建物を背にする。本降りだった雨も小雨になり、登山道は樹林の中を歩くことしきりなので合羽は上着だけ羽織ることにした。

しばらく続いていた急登も小康を得て、その頃から幅の広い道に変わって周りのブナ林も美しいところだ。ガスって見えた高い山の陰はおそらく次に待ち構えるピークのように、ここは直登で越えなければならないので登山道は行き掛かり上、再び急登を迎えることになる。

見る見るうちに標高を上げているのが実感でき、足元に笹が目付きだしてから一段落する。尾根幅が広がった辺りの紅葉の美しさは格別のものであるが、雨の中ではそこそこに見てひたむきに歩くことになる。

急登をぶりがえして尾根の片側が開けてくるようになれば、間もなく短い鎖場に差し掛かる。小倉山に近づいていることはガイドブックにも記している通りであるが、しかし、この間が思った以上に長く感じられた。

小倉山に着いたのは13時だったが、止んでいた雨がまた強く降るようになった。山頂から少し行ったところで枝折峠からの登山道に合わさるが、これまでの登山道と状況が一変してくるのは雨の中でも登山者がたくさん歩いていたことだ。下山して来る人に聞くと、駒ノ小屋は団体の宿泊者で大賑わい、との事。小屋の中で遠慮なしに雨具を目いっぱい広げて乾かし、ザックの中の何から何までも全部取り出して、もう一度きちんと、おおっぴらに整理し直すことを無理のようである。

この先は一度歩いているが、難儀なのは登山道の状態であり、降りしきる雨で川のようになっている。場所によっては泥濘化して足置き場がなく、笹や灌木の幹を掴んで登山道の縁をバランス取りながら歩くことになる。

長く続けば疲れる所作であり、その事ばかりに神経を使い、やりきれない気持ちで登って行くと前駒のピークに着く。ここから駒ノ小屋まで岩場を登って行く。緩い斜面の岩場であり、難しいところは特にないようだ。

肩ノ小屋では寝る場所に銀マットが敷いてあり、毛布も貸してくれるとのこと。ただし協力金として2000円を支払い、また気が付いたことは、この小屋では管理人が表に出てあれやこれやと指図することはなく、泊まる人が自分で寝る場所を確保し、混みあえばお互いにスペースを譲ったりしていたことだ。

平成20年10月12日(日) 天気 曇り後晴れ

小窓の引き戸を開けると冷たい空気が肌を刺し、すり寄って外を覗きこむと一本の灌木が真っ白になって霧氷のようだ。一日中降り続いていた雨が夜半からの気温の低下によってもたらされたものである。

外はガスがおびただしく流れ、風も吹きつづけているようだ。夜が明けてもすぐに小屋を出る気持ちにならず、手持ち無沙汰になりながらぐずぐずして結局小屋を出発したのが6時10分である。

緩やかな登りで中ノ岳に向かう分岐に着き、越後駒ヶ岳は右側に10分もあれば帰って帰られる。晴れていれば越後の山々、会津の山々、果ては北アルプスまで展望が広がって申し分ないのだが、そのことは中ノ岳に期して、山頂には5分ほど留まって切り上げた。分岐から始まる中ノ岳の登山道はクマザサが刈り払われ、しばらくは下って行く気配である。

10分後にクシガハナに向かうコースを右側に分けるが、その先の登り返しはたかが知れたもので、下り坂の大勢に変わりない。諏訪平の標識を見てから更に登山道は一段と急下降になり、それにともなって左側は深い谷になっていく。

右側も険しくなる頃には急坂はその度合いをつのり、下り切って平地に出れば間もなく天狗平という場所に着く。この場所が最低鞍部とのことだが、ここまでの急坂だったとは遠くから分からないもので、先週の荒沢岳からの眺めは緩やかな連なりにしか見えなかった。この頃には天気に変化がきざし、ガスの中に宿していた日が薄い部分から光がもれるようになり、灌木の薄い影を地上に落としていた。

変化は矢継ぎ早で、ガスが瞬間的に晴れてはその合間に山肌を露わにすることを繰り返す。ほんのひとときから、たちどころに紅葉が広がるままになった。ガスは完全に晴れ、青い空も視界いっぱいになり飛び込んできた。

こうなれば浮き足立って歩く事は避けられず、息の長い登り返しも当面は苦にならないところだ。高みに立つ頃には遠くの間々も眺められるようになり、荒沢岳の尖峰もはっきり大空に映し出されるようになった。

次の高みは岩肌を左側に巻いて通り過ぎ、その先から小さなピークを幾つか越して歩く。黒木やシャクナゲが目につく頃から檜廊下の始まりなのであろうか。

尾根上の黒木を避けて右斜面を導いていた登山道は、今度は這い登るような姿勢で再び尾根に上がり、背後の尾根に没していた越後駒ヶ岳がせり出して見えてくるようになる。越後駒ヶ岳からの綿々とした尾根に洗ったような日の光がそそくと紅葉は鮮やかさをしたたせ、広がっているのはまぎれもなく秋の景色だった。

黒木が目につかなくなると久しくなったが、これから登って行く二つほどの高みは、中ノ岳と本体で前線に一翼を担っているようなコブに相当する。太陽は中天に差し掛かってきたが、この時間になっても中ノ岳の西側斜面は霧氷で一面を真っ白にし、対照的に東側斜面は秋の日がまぶしいほどに照って赤く紅葉した灌木を浮かび上がらせていた。ここまで歩きがてらに中ノ岳から八海山への橋渡しになっている険しい細尾根に視線が止まりがちになり、その行く手を暗示している最初の突破口が中ノ岳の山腹から突き出している御月山だ。中ノ岳直下から予想していたとおりの急な登りになり、八海山の分岐を越して間もなく避難小屋に着く。

今日は小屋閉めの日に当たっていたのか、関係者が小屋の周りで忙しく動いていた。ここからほんの少し足を運んで標識の立っている中ノ岳に着いたが、昼食を取っている間に小屋の関係者も含めて5、6人の人に出会っただけの静かな山頂だ。駒ノ小屋に泊まったあれだけの数のハイカーの中に中ノ岳まで縦走するのは他に見当たらず、逆コースで中ノ岳から越後駒ヶ岳に向かっていく4、5名の若者のパーティ1組に会っただけである。十字峡から登って来たハイカーは中ノ岳まで5時間かかったと言い、早い人は4時間で登ることができるとも言う。

中ノ岳を辞する時にすれ違いになった1人のハイカーは6時間かかったとあえぎながら話をし、今日は避難小屋に泊まって、さっそく今から酒を飲むつもりだと言っていた。コースタイムがハイカーによって大きく異なるのは、それだけ急登であることを物語っているようだ。十字峡に下って行く分岐の池ノ段には山頂から20分後に着く。ここで尾根伝いに行く丹後山の登山道を左側に見送って広い斜面を下る。笹原の中、灌木の中、と急な下り坂が続いて7合目の石標の立っている目印に気づいたが、9合目、8合目は通り過ぎてしまったようだ。登り返しを登り切って6合目の石標を見ることができ、その後緩やかな登り下りを経て一つ目の池塘は右側の縁を歩く。二つ目、三つ目の池塘を見て通り越し、ほどなく雨量計のある小屋の下に着く。この場所には日向山の標識が立ち、五合目の石標も埋まっている。急坂は止めどもなくこの後も続き、周囲は灌木からブナ林に変わっていく。四石目の石標を見て5分後には木々越しに十字峡の目安になるしゃくなげ湖を覗くことができ、ブナ林を抜けるとしゃくなげ湖をはっきり捉えることができた。三合目で休憩を挟み、またブナ林の中に入って行くとやがてエアリアマップに記す千本松原に着き、ここでコースタイムと照らし合わせることができた。二合目から道々に段差を挟んでペースが乱れ、一合目を過ぎると周囲の雑木林の葉は緑の色を濃くして秋の装いはこれからのようである。西空で落日を急いでいる太陽を気にしながら休み無く歩き、やがて足下に降り立つ車道を覗いたら濃い闇に包まれていた。

コースタイム

10月11日

小倉尾根登山口 9:10 小倉山 13:00

百草の池 13:50~13:55 前駒 14:45 駒ノ小屋 15:20

10月12日

駒ノ小屋 6:10 中ノ岳分岐 6:25 越後駒ヶ岳 6:30~6:35

中ノ岳分岐 6:40 諏訪平 7:00 天狗平 7:35~7:40

中ノ岳 11:45~12:10 池ノ段 12:30

7合目 13:25 日向山 14:20~14:25 千本松原 16:00

十字峡 17:25

費用

- ・ タクシー代 浦佐駅~駒ノ湯 一台 5,610円
十字峡~六日町駅 一台 6,430円
- ・ 宿泊費 2,000円

役員会開催のお知らせ

平成20年度第2回の役員会を下記要領で開催いたします。ご多忙中と存じますが役員の皆様は万障お繰り合わせの上ご出席お願いいたします。

なお、役員会終了後、場所を替えて食事会を行いますので、一般会員の方も奮っての参加お待ちしております。希望者は12月13日までに高柳まで。役員会への参加も歓迎です。

日 時 平成20年12月20日(土) 午後1時~午後5時迄
場 所 豊島区勤労福祉会館 第2会議室(4階)03-3980-3131
議 題

1. 来年度からの新任リーダーの検討
2. 平成20年5月以降の山行計画立案 各自計画したい山を提案の事
3. その他

お知らせ

- 1) 【上州 荒船山】は参加者僅少のために中止になりました。
- 2) 受贈会報「木鶏」2008年11月号

山旅 No.177 平成20年11月1日発行 発行者 高柳 正敏 編集者 八木元一
発行所 埼玉県草加市瀬崎町347-20 高柳方 好山好山旅会
WebSite <http://r-p.homeip.net/kozanko/>